

令和 6年 3月 12日

公益財団法人
産業構造調査研究支援機構 御中

住 所 千 東京都八王子市大塚 359 番地
機関名 帝京大学
代表者 学長 冲永 佳史



産業構造調査研究事業報告書

産業構造調査研究事業の実施について、下記の通り報告します。

記

- 1、研究課題 江戸後期、播州地方で私札を発行した掛屋（両替商）の経済活動の解明
- 2、研究代表者 経済学部 准教授 増田 里香
- 3、研究実施の概要 別紙のとおり

研究事業に関する実施概要

1. 研究の目的と意義

本研究の目的は江戸後期の播州地方において私札を発行した両替商（掛屋）増田家（現・兵庫県加西市繁昌町）に残る史料（主に会計帳簿類）をもとに、同地区の産業構造、金融構造を明らかにし、最終的には農村部の金融構造の解明を目指すところにある。本申請では、その第一段階として、同家に残る史料の翻刻を主目的とする。

同家当主（繁昌村）紋治郎は江戸末期に私札を発行した。私札の一部は日銀貨幣博物館にも所蔵される。同私札は壬生藩の藩札としても流通し、同家が同地域に現存する酒蔵（三宅酒造・歳次郎）と連名で発行した私札（酒切手・酒預切手・御米價切手）も多く、共に米会所の機能を果たしたと推察される。幕末に新設兵庫県の商法知事から北播（現西脇市・三木市・小野市・加西市・加東市・多可町の5市1町）の会計御基立調進金并拝借取次（借金の仲介係）を任命された近藤家文書によると、紋治郎は北播内最多額3,000両の借入を要請された。このことから増田家を介した大きな経済活動が行われたことが推察される。北播を含む播州地方は江戸時代に大きな繁栄を見せた。その理由としていくつか示唆される。まず、豊かな農業地帯であったことである。肥沃な土地で稲作や麦作等の農業生産活動が活発で、物資の豊富さが地域経済の発展に繋がった。二つ目に、交通の要所であったことだ。山陽道と山陰道の交差点に位置し陸路での交通や物流が発展、運河や運送業も盛んになった。三つ目に商業都市であったことである。商人が行き交う交通の要所として商業が発展した。特に、大坂など大都市に向け物流が活性化された。大坂からの距離の近さもある。このような背景もあり、増田家所在の地域では大きなお金が動いたことが推察される。しかし、その正確な理由や実態は明白にされていない。

本研究は、江戸後期の播州地方の産業構造・金融構造の実態とそこでの私札の役割を解明するための研究の第一歩として、増田家所蔵の会計帳簿類の翻刻を行い、その結果に基づいて論点と課題を明らかにすることを意図している。

ここで、史料の翻刻を行うことの学術的意義として以下の諸点が指摘できる。

- ① 長期間に及ぶ金銀出入帳の整理を行うことは会計史上、それだけでも価値があることとされる。併せて研究が不十分であると考えられる同時期発行の私札の経済活動上の役割や帳簿との関係を解明する礎を作ることで、同地の産業構造や経済構造が明確になる。
- ② 大量に発行された私札は、発行量の多さは必ずしも経済力を表すものではないのはいか、という先行研究の指摘があるが、その真偽を確認する礎となる。
- ③ 同地方は畿内近国で、かつ、他にも恵まれた要素が多く幕府直轄地（御三卿家地）がまた存在し、同家も直轄地内に存在する。直轄地の農村金融を明らかにする礎を築くことの意義もある。
- ④ 先述の通り、同家は廃藩置県時多額の借入要請を受けた。当時の畿内図（繁昌村が◎表記）でも同地区で大きな経済活動が行われたことが推察されるものの、市史等の同地域の資料にはそのような記録は見られないため、地域史等への貢献も期待される。

【参考】

増田家で保存する私札及び帳簿類：

<https://www.facebook.com/media/set/?set=a.4565968553439411&type=3>

<https://photos.app.goo.gl/aYhePiZHigRHX8R96>

研究成果に関する実施概要

2. 研究体制（メンバー及び分担）

本研究は、以下の研究者 4 名及により進め、翻刻は研究協力者のご協力を中心に行った（所属は 2023 年 4 月 1 日現在）。

研究代表者 : 氏名 : 増田里香

所属 : 帝京大学 経済学部 准教授

スリランカ国立ルフナ大学 客員研究員

専門 : インフォーマル金融・地域金融・開発金融

共同研究者 : 氏名 : 金子哲

所属 : 兵庫大学 現代ビジネス学部 教授

兵庫県加古川市 文化財審議会 委員

兵庫県加古郡稲美町文化財保護審議会 委員(副会長)

専門 : 播州史・中世史

共同研究者 : 氏名 : 加藤慶一郎

所属 : 大阪商業大学 総合経営学部 教授・商業史博物館長

専門 : 日本経済史・日本経営史

共同研究者 : 氏名 : 郡山志保

所属 : 立命館大学 立命館グローバル・イノベーション研究機構 研究員

京都造形芸術大学 通信教育部 非常勤講師

京都外国語大学 非常勤講師

(元兵庫県加西市教育委員会・学芸員)

専門 : 播州地域史・近世史・所領配置

研究協力者 : 氏名 : 後藤浩

所属 : 元中学校歴史地理教員。

専門 : 当地出身者。当地の歴史地理に詳しい。地域史に造形が深い。
他数名。

3. 研究実施概要と成果

(1) 研究会・勉強会等日程

研究会：2023年6月17日（土）10時～16時 増田家住宅にて

参加者：研究代表者・共同研究者3名・研究協力者1名

研究会：2023年8月22日（火）13時～18時 増田家住宅にて

参加者：研究代表者・共同研究者1名・研究協力者1名

勉強会：2023年10月21日（土）13時～19時 増田家住宅にて

「私札・藩札について」・その他

参加者：研究代表者・共同研究者1名・研究協力者3名

講師：加藤慶一郎

勉強会：2024年2月27日（火）13時～17時・増田家住宅にて

参加者：研究代表者・研究協力者2名

勉強会：2024年2月29日（木）13時～17時・増田家住宅にて

参加者：研究代表者・共同研究者1名・研究協力者2名

その他、必要に応じ、Zoomでの勉強会を数回、共同研究者による研究協力者への電話でのアドバイス等を数回実施している。

(2) 学会発表

研究代表者 2023年7月29日（土）

東北アジア文化学会 2023年度春季聯合国際学術大会

テーマ：

「播州地方における江戸末期の両替商による私札の発行と経済活動について」

(3) フィールドワーク

研究代表者が勉強会の前後にあたる2023年6月、8月、10月に現地で実施している。

(4) 研究成果について

研究成果物

本年度は当初の予定通り、来年度以降の研究の足掛かりとして、聞き取り調査、翻刻を中心に行った。翻刻は『金銀出入帳』を中心に、専門家である共同研究者の意見を取り入れて、分析に深みを持たせると考え得る史料もあわせて行った。翻刻の成果物については、別途、提出予定である。当地では江戸時代から現在まで代々同じ地に継続して住み続ける方々が多く、成果物は金銭の貸借が関係するため、倫理的配慮が必要になる。現時点での配布については申請先の研究機構及び翻刻関係者に限定する。先々には公開を検討する。

以下は研究の成果となる翻刻を行った史料の一覧である。

『金銀出入帳』 5冊

『出入差引帳』 1冊

『当座萬覚帳』 1冊

『大福帳』	1冊
『当座帳』	1冊
『切手引替帳』	1冊
『村差出明細帳控』	1冊

分析と今後の研究に向けての課題

翻刻を進めるなかで、金銭のやり取りは近隣住民にとどまらず、加西郡内や播州内で頻繁に行われていることが確認できた。具体的には現姫路市をはじめ、明石市、加古川市、高砂市など広範囲に及ぶ。当然のことながら、距離が離れるにつれて取引金額は大きくなる。また、既に登記簿や系図、その他史料から、増田家は播州福本藩領の大庄屋、鶴野金兵衛家と婚姻関係や養子関係が頻繁に結ばれていることは判明していたが、帳簿類からは両家間に多くの金銭取引が残されていることも明らかになった。このように金銭に限らず様々なやり取りが播州内広域の有力商人間で行われていることが確認された。また、増田一族が一体となって、酒造業、油屋業、地主などを行っていることも判明した。

壬生藩の飛地領美囊郡から離れた加西郡にある増田家及び三宅酒造によって連名で壬生藩の藩札が発行された理由については、今後明らかにしたいが、藩札の厳しい発行条件を課すために意図的に美囊郡から離れた地域の有力商人を選んだ可能性が窺われた。金銭貸借について、融資は月利1%（年利12%）で実施されていたことが判明した。これは当時の融資利率から考えて法外な利率ではない。また、調査過程で、同家当主紋治郎が長野まで養蚕技術習得に向かったこと、自宅で手習所を営み、学問のみならず農業技術についての指導を行っていたことなども判明した。地域住民に対する一種の慈善的活動、または利他共栄の精神に基づく活動が推察される。これは自身への還元を期待してのことであるかも含め、判断は慎重にすべきであるが、途上国で指摘される高利貸しとは様相を異にする可能性が窺われた。同家が農村においてこれだけの経済力を持つまでに至ったのか、そして私札・藩札の仕組み、同家が地域で果たした役割の解明は今後の課題である。その際には、加西郡となりの加東郡の豪農である近藤家の存在も含めて検討したい。作道（1971）は著書の中で近藤家の大名貸と企業家活動に一章を割いて分析を行っている。日本長者付についての正確な検討の余地を指摘しながらも、東の大関本間家の財産が40万両であるのに対し、東の近藤家は60万両に達し（小西 1951）、近藤家の影響力の大きさを物語っている（作道 1971）。近藤家の土地の所有関係などから、増田家の当地への影響力の大きさも推察された。

主要参考文献

岩橋勝（2019）『近世貨幣と経済発展』名古屋大学出版会

加藤慶一郎（2021）『日本近世社会の展開と民間紙幣』塙書房

小西勝次郎（1951）『土のかをり 第一篇 近藤亀藏の巻』土のかをり社

作道洋太郎（1971）『近世封建社会の貨幣金融構造』塙書房

高槻泰郎（2012）『近世米市場の形成と展開－幕府司法と堂島米会所の発展－』名古屋大学出版会

経費の使用内訳

費 目	当 初 予 定 額	実 支 出 額
(1) 印刷・製本費	0 円	145,443 円
(2) 学会発表に関する費用	150,000 円	110,966 円
(3) フィールドワーク出張費	300,000 円	317,619 円
(4) 会議費	40,000 円	7,089 円
(5) 翻刻費用（支払報酬・源泉徴収税）	1,300,000 円	1,300,000 円
(6) 消耗品費	0 円	
（中性紙箱）		95,700 円
（研究会映像映写用）		22,300 円
（事務用品）		883 円
(7) 図書費	210,000 円	
	合計：2,000,000 円	合計：2,000,000 円

最後に、本研究は、本研究助成により当初計画通り調査研究を実施し、研究成果を得ることができた。貴機構に感謝申し上げたい。